

**■内容サンプル49. 北欧の国々の経済成長「何故でしょうか」**

連休が最終日になったと思ったら、立夏も過ぎ、いよいよ緑が深まってきますね。最近の日本における後期医療制度、年金、教育などの課題を考えると、私は、ビジネスマンとして1971年に初めて訪問した北欧の国々のことを思い出します。特に1971年には、日本産業巡航見本市船「新さくら丸」で日本との経済摩擦が顕在化し始めていたEEC諸国でした。その時フィンランドのヘルシンキ・スウェーデンのストックホルム・アイスランドのレイジャビーク、デンマークのコペンハーゲンの北欧も訪問しました。その時のことを、より思い出すために日記を連休中に取り出してみました。北欧で当時共通していた社会問題は、第2次大戦後の荒んだ心、列強国との経済格差、貧困のストレス、冬の極寒からの逃避のためアルコール中毒になったり、泥酔での凍死でした。

しかし、現在のグローバル化が進む世界で、高福祉・高負担のなかで、北欧の国々は経済成長を続けています。「何故でしょうか」、もちろん、彼らのバイキング時代からの歴史観と宗教観からの強い人生への意思もあるのですが、その後、私は北欧諸国を訪問する機会があり、彼らの厳しい、地味な努力を見てきました。例えば、アイスランドでは、レストランでエビを注文しても尾っぽのところしかありませんでした。身はすべて輸出だということです。また、ノルウェーでは、休日は国を挙げての「ノーアルコールデー」を作っていました。フィンランドでは、育児と仕事を両立し教育で子どものときから鍛え直し、スウェーデンでは、IT技術をいち早く進歩させ、王室が社会保障制度を国民と考え、デンマークでは、労働者の「学ぶ力」から環境と経済のバランスを考えた政策を乗り切ってきました。北欧の役人たちは、派遣ではなくコンサルタントとして発展途上国へ出稼ぎにも出かけます。

つまり、国民の総力で知恵を出し、男女が共同で参画し、福祉と教育は市町村が分担し、国民の政府への信頼感と、国民も厳しい倫理観を持ち、節度ある生活を心がけて、自分のこととして社会保障制度を考えてきたからこそ、高負担も乗り切れているのだと私は、感じています。いかがでしょうか。